

## *A Severed Head* における錯綜する愛

石本弘子

この作品は1961年に書かれた Murdoch の5作目の小説である。この作品が発表された翌年に Harold Hobson との対話で、Murdoch はこの作品と *The Flight from the Enchanter* がお気に入りだと告白している。主人公 Martin はワイン商をしており、片手間に軍事研究もしている。社交界で名を馳せた美人の妻 Antonia と表向きには幸せな結婚生活を送っているが、実は愛人 Goergie の存在を隠している。この物語は Martin と妻 Antonia、愛人 Goergie、Martin の兄 Alexander、Antonia の愛人 Palmer、Palmer の妹 Honor の三人の男性と三人の女性が恋愛相手を変えながら進んでいく。考えられる9通りの組み合わせのうち、8通りの恋愛関係が成立するというやや常識外れな設定であるが、Murdoch が実に綿密に考慮して恋愛が発生するので、この設定には不思議と違和感がない。この小説の恋愛はエディプスコンプレックスや不倫や近親相姦や同性愛など、大変バ

ラエティーに富んだ問題を抱えた内容である。このうち、この発表ではエディプスコンプレックスと近親相姦と Martin の Honor に対する愛について考察したい。

初めにエディプスコンプレックスについて Martin と Antonia の夫婦関係から考えてみると、この二人は男と女の関係ではなく、母親と息子の関係だとわかる。Antonia は Martin のことを頻繁に 'My Child' と呼びかけていることから、夫婦が別々の寝室を有していることから、男と女として愛し合っておらず、エディプスコンプレックスの典型だとわかる。「Martin には彼を子供としてみてくれるご主人様が必要なのだ。」と A.S.Byatt は述べている。Martin は兄 Alexander の中に母親を映し出し、中年になってからも、彼の心の中では必要以上に母親が鮮明に生き続けている。その反動で Alexander は Martin の恋人を次々と横取りしていたのだ。また Antonia に関し

ても亡き母親の代用として、Martin は結婚相手に選んだと考えられる。

それから、近親相姦について考察したい。1956年にイギリスでは法律で近親相姦が禁止されているので、この小説が書かれたころは、このトピックは比較的新しいものであった。Palmer と Honor の兄妹の近親相姦は彼らがまだ年少の頃から続いていた。彼らの母親が正気を失ったのも、このことが原因だったと推測できる。そして、二人とも社会的地位が高いので、ひたすら秘密にしていたのだ。物語の中盤で Martin は Honor に恋する気持ちを抑えきれずに、Cambridge の Honor の家を訪ね、戸を壊して二階の彼女の寝室へと侵入する。そこで、寝室のベッドに寝ている Palmer と Honor の近親相姦の場面を目撃する。彼を Cambridge に駆り立ててこの発見をした原動力は、酒蔵で Honor に暴力をふるった事件によって発散されたのだ。近親相姦を目撃したことがきっかけで Martin と Palmer の力関係が逆転し、Martin は優位になる。Martin は恋敵の決定的な事実を突き止めたが、近親相姦に対して抑えがたい恐怖にかられる。Palmer はこのことを言外しないことを Martin に約束させようと試みたが、Martin は自分が優位に立つために敢えて約束はしなかった。

Antonia が離婚をしたいと言い、愛人 Palmer

のもとに去ったので Martin は妻を失った。そして、Goergie にも物足りなさを感じ、大きな強力な愛が必要となってくる。「Honor は人間らしい考えを救済する本質と大きな愛を併せ持っている」と A.S.Byatt は述べている。Martin が愛を必要としていた時、ちょうど Honor が現れる。Honor の印象は Martin の中で、醜い独身女という第一印象から、その後、力に溢れた指揮官になり、それからヘブライの天使になり、最終的には愛に満ちた女神になる。Honor は自らを呪われた身として諦めて、愛を受け入れることを拒んでいたが、物語のエンディングで Martin の家に急に現れて、ギュケスとカンダウレスの神話を持ち出す。この神話の影響を受けて、Martin は Honor によって、恋人に選ばれる。Honor の近親相姦の場面と Honor の裸体を見たことにより、特権を得たのだ。神話をモチーフにした Murdoch の試みは効果的で機知に富んでいる。この二人の愛の行方に興味を持つ読者を Murdoch は優しく受け止め、「あなたはチャンスをつかまないといいない。」「君もね。」と結んでいる。Martin を中心に展開するこの恋の物語はとても痛快で心地よく、Honor が自分の正体を語った響くセリフには感動した。またエディプスコンプレックスや近親相姦について考えさせられた。このような特殊な愛や人間の愛の多様性も理解できたような気がする。